

## 女子大教員の異常な愛情

：または私は如何にして” 教える” のを止めて戦場を愛するようになったか

池田 緑\*

### 要 約

女子大学の教育目的には、「地位形成機能」と「地位表示機能」が存在するといわれてきた。しかし男女共同参画社会の趨勢のなかで、女子大学には改めて「地位形成機能」の充実が求められている。しかしながら目を転じれば、女子大学では古風な性別役割観が再生産され、家父長制的価値観に学生を回収しようとする企図も、いまだ根強く残っている。

そのような企図は、女性へのセクシャルなまなざし、ミソジニー（女性嫌悪）と共に存在している。同様な視点は女子大学を取り巻く環境にも、また女子大に勤務する教員にも共有されている。家父長制的価値観は、女子学生の「成功不安」を喚起し、学生の自己評価を貶め、男性依存への道を準備する。

その結果、女子大学においては「地位表示機能」が重視され、そのことが彼女らを学問から遠ざけてしまう。このように伝統的性別役割観が再生産され、学生たちの学問への動機が奪われてゆく過程は、一種の「温室効果」に似ている。

そのような状況を打ち破るためには、「温室」を、ジェンダーの政治が露見する「戦場」に作り変える必要がある。そのためには、最初に男性教員を中心に、ジェンダーを克服することが、学生自身に学業の意義を理解させるための第一歩であり、そのような学問が社会的需要とも合致していることを理解することが必要である。

そのような認識の共有のためには、男性教員をジェンダーに意識的にするための制度作りが必要である。そしてすべての授業において、ジェンダーの視点から男性中心の学問体系を再構築することが求められており、その結果として行われる教育は「女性支援教育」と呼ばれるにふさわしいものとなるだろう。

### 1. 女子大教員はジェンダーの夢を見るか？

女子大学（以下、女子大）は、その存在のありようから政治の実践の場であらざるをえない。そこでの政治はジェンダー・ポリティクスとして

記述され、解析される必要がある<sup>1)</sup>。

女子大に勤務する教員の大多数は、女子大であることを理由にそこを職場としているのではない。雇用条件やロケーション等を勘案して、共学大を含むいくつかの選択肢のなかから勤務先を選

\*大妻女子大学 社会情報学部

んだにすぎないだろう。とくに就職状況が厳しい若手教員においてこの傾向は強く、いってみれば「たまたま採用されたから」という理由で勤務していることもありうる。学生の場合はもう少し複雑である。共学大を含めた受験競争のなかで、結果的に女子大を選んだ場合もあるだろうし、明確に女子大を志望していた場合もある。しかし、この双方の偶然性／蓋然性にかかわらず、女子大という場は強制的にそこに参加している人々をジェンダーの政治に巻き込んでゆく。

本稿は、拙稿「男性言説をめぐるポリティックス」(池田, 2003) および「女子大学に勤務する男性教員の政治的位置性」(池田, 2004a) と内容的に連続したものである。とくに後者(池田, 2004a) の直接的な続編・補完編と位置づけられる。本稿では、紙幅の関係から上記論文に記載されている内容については、必要な箇所を除き重複を避けている。女子教育への歴史的な評価、女子大に内包されているジェンダーの視線、女子学生の身体を規律化する政治、男性教員間に維持されているホモソーシャリティ、男性教員の政治的位置、等については拙稿(池田, 2004a) に詳しいので、そちらを先に参照してほしい。

本稿では、共学化の流れの中で、女子大がもつ社会的意義について確認し、その意義ゆえに女子大がジェンダーの政治の渦中にあることを、私自身の経験から論じ、その政治を転換させるために必要な戦略について考えたい。それらの事柄は、換言すれば、ジェンダーの政治を運命付けられている女子大が、その政治性を武器にして“女子大”から解放されるための途でもある。その意義は、社会に対しても小さくない影響を与えうると考える。

そのような行為の中心的な担い手として想定されるのは、いうまでもなく女子大に勤務する教員である。なかでも、女子大におけるジェンダーの政治に“参加してしまっ”ている男性教員の存在は重要である。後述のように、男性中心の社会を代表する存在として女子学生と対峙している男性教員は、今後の女子大のあり方にとってカギとなる存在であり、ジェンダー・ポリティックスにお

ける社会のモデルとしても意義が大きい。したがって、本稿では女子大に勤務する男性教員を念頭において論を進めたい。なぜなら、男性教員のあり方が、今後の女子大の存立意義そのものを左右する問題となりうるからだ。

## 2. 暴力教室

先生と生徒の関係というのは、有識と無識という階級関係によっては成り立たない。

「知らないから教えてやるのだ」とか「できてないから人間を作ってるのだ」という教育の姿勢は、いつかはブラックボード・ジャングルと呼ばれる「暴力教室」の氾濫を招くことになるだけである。-寺山修司-

(寺山, 2003: 278)

2005年に四年制大学への進学率は、男子51.3%、女子36.8%を超えるようになった(中西, 2006: 87)。とはいえ、女性の4割弱という数字は大学に進学できる女性はまだまだ恵まれた存在であることを示している。ある意味で、女子大は女性に対する社会の欲望や視線を表象してきた。それは産業労働力としての女性と、家内労働力としての女性への欲望である。この2つの視線は、女子大に自立促進志向と良妻賢母志向という2つの性格をもたらしてきた<sup>2</sup>。戦後の大勢としては、女子大は女性の地位向上を目指して、保護主義的別学制度を発展させてきた<sup>3</sup>。その意味で、女子大には「女性解放の砦」という意味合いが歴史的に存在してきた。青木生子は、昔ながらの女性像に基づく教育が行われ、それが社会の一定のニーズを満たして存続してゆくなら、そのような女子大のあり方は女性の進歩を阻むものであり、“花嫁学校”としての女子大は存在意義を問われるべきだと論じるが(青木, 1980: 57; 1995: 16)、その見解は女子大が果たしてきた女性解放への礎という歴史的機能に照らし合わせたものといえるだろう。

しかし近年の共学大への女性の進学増加によって、職業志向の女性は共学大に進学することが多

くなり、その一方で社会的な言説において女子大には良妻賢母の表象がより限定的に、かつ強く求められているように思われる。そのような言説は、とくに反フェミニズムを標榜する論者において顕著である。たとえば千葉展正は、女子大の建学の精神は良妻賢母にあり、フェミニズム教育は大学を閉鎖的にするといい（千葉，2004：52-55），また西尾幹二は、女子大はジェンダーフリーに毒されていないから優秀な人材が輩出されており、男女それぞれの特徴をよく育てるためにも別学がよいと説く（西尾・八木，2005：62；263）。さらには男女の“脳差”を持ち出して男女別学を説く言説まで登場している（エドワーズ，2002：342-343）。これらの多くは、厳密には小中高校を含めた議論で女子大学のみを想定したものではないが、そのロジックは女子大まで射程に入れたものといえるだろう。

これらの性差別的言説が投げかけられている現状を鑑みれば、女性の人権拡大という観点から「女性の自立と解放を目指さなければ、女子大は女性差別再生産機構」という加藤春恵子の指摘は的を射ている（一番ヶ瀬・安川・加藤，1995：273）。サドカーら（Sadker, M & Sadker, D, 1994=1996）やデュリュ＝ベラ（Duru-Bellat, 1990=1993）らが明らかにしてきたように、共学課程においてすら、明示的あるいは「隠れたカリキュラム」としてジェンダーの再生産が行われてきたのであるから、よりジェンダー・バイアスが発揮されやすい女子大教育は意識的にジェンダーを解体するものである必要があり、「良妻賢母」を女子大に表象させようとする社会的圧力に対抗するものでなければならないだろう。

ところでここに2冊の本がある。一つは1996年に出版された加藤大地による『女子大は憲法違反か!？』であり、もう一冊は2006年に出版された白楽ロックビルによる『脱力系女子大教授』である（白楽，2006）<sup>4</sup>。約10年の期間を空けて出版されたこれら2つの本にはいくつかの共通点がある。まず、著者が女子大の教員であること、共に仮名であること（ただし、白楽は自らがお茶の水女子大に勤務していることを明かしているが）、

共に年輩の男性であること（著作内容より推測可能）である。この2冊を読むと、世間（の男性）が女子大に対して抱いているイメージが、女子大教員当人によって再生産されていることがよくわかる。正直なところ、この2冊は唾棄すべきものであると考えるが、女子大について（女子大をメインテーマとして）書かれたものとしては、例外的に読むに耐えうる内容を有している<sup>5</sup>。そして女子大イメージの再生産という点については、10年経っても何も変わっていない。両著は、以下の3つの点で近似した視点によって書かれている。

1つ目は、女子学生をきわめてセクシャルな視点で眺めている点。白楽ロックビルは、自身が女子寮で舞い上がってしまった経験を「若いメスの集団に圧倒された」とコミカルに描き（白楽，2006：34），ストーカー被害に困っている学生を「すぐに、声をかけてもらえなくなるよ」と茶化す（白楽，2006：119）。仮にもこれが全国紙（讀賣新聞）の夕刊連載だったというのだから驚く。振り返れば10年前に加藤大地は、女子大生の色香への誘惑を語り（加藤大地，1996：115），「最近の女子大生にはホステスのような学生がいて困る」と嘆き、同じく女子大教員から「いや、キャバレーのホステスがたまたま女子大生になったのさ」と返されたことを「まさに歴史的名言」と讃え（加藤大地，1996：87-88），「卒業式後にボーイフレンドとラブホテルに直行し、二人だけの本当の卒業式をすませ」る学生に驚かせていた（加藤大地，1996：150，傍点原文ママ）。エロ親父の視線全開である<sup>6</sup>。女子大生のイメージがスポーツ新聞のエロ記事と同レベルであるが、世の男性の抱くイメージがそのまま女子大に持ち込まれ、再生産されていることがよくわかる記述である。

2つ目は、ミソジニー（女性嫌悪）の視点である。加藤大地は、女子大は「ハゲ・白髪・肥満の中高年男性教授」と「すでに女をやめてしまったようなオバタリアン教授」に占領されているとし（加藤大地，1996：34），「女性的な男性教員と男性的な女性教員という性役割が逆転した現状」を学生は望んでいないと論ずる（加藤大地，1996：

51)。とくに年輩の女性教員への憎悪は激しく、「結婚もせず、家庭ももたず、育児の経験もなく、男性も知ら」ない「ハイミス女子大教授」は学生にとって反面教師でしかなく、女子大教育に悪影響を与えていると指弾する(加藤大地, 1996: 63-65)。これらの視点は、ミソジニー(女性嫌悪)とエイジズムが混在したものであり、さらには男性教員に対しても差別的である。加藤が描く「ハイミス・オバタリアン教授」なる像は、ステレオタイプなフェミニストへの中傷としておなじみのものであるし、彼の「オバタリアン」への攻撃は、典型的なホモソーシャルな反応でもある。

ホモソーシャルリティとは、セジウィックによる概念で、女性を外部的な性的な対象とすることによって、同性愛を慎重に回避しつつ男性間で成り立つ社会的な関係性のことである(Sedgwick, 1985=2001)。そのシステムの維持のためには、女性がつねに性的な存在でなくてはならず、男性と平等な社会的関係を結ぶ存在とはなりえない。とくに中高年男性にとって働く中高年女性はホモソーシャルな関係性を脅かす存在であり、ホモソーシャルな価値観を内面化した男性であるほど、女性と性的関係以外の社会的な関係を結ぶことに慣れていない。そのため働く女性、しかも一般職といった男性補助的な職制ではなく、男性と対等な権限と地位をもって働く女性を、ことさら嫌悪するのである。

さらに加藤のミソジニーは、同僚女性教員に留まらず学生にも向けられている。彼は女子大に特有にみられる特徴を「女子大現象」と名づけて紹介している、たとえば、女性特有の粘着質な人間関係、男の目を気にしない“女子大的恥態”、名前やニックネームで呼び合うこと(共学大でもあると思うが)、バスの中で「ぴったりと皮膚接触されて、若々しい体臭と脂粉臭」とに囲まれる逆セクハラ状態、などである(加藤大地, 1996: 90-94)。きわめつけは、2年生の夏休み終了後、恋の季節を迎え「何とも美しいアゲハ蝶に変身」し、大人の女性に一步踏み入れる「二年の秋症候群」といった記述である(加藤大地, 1996: 98-

99)。学生の容貌変化をアゲハ蝶に例えるあたり、なんともネットリとした男性の視線が滲み出ているのではないか。「粘着質」なのはあんただろう、と思わず突っ込みたくなる表現だが、この容貌への賞賛と生活態度への嫌悪は、ホモソーシャルな視線とミソジニーの発露という点において、「オバタリアン・ハイミス教授」への嫌悪と表裏一体である。

10年後の白楽ロックビルも、加藤ほど露骨ではないものの、女子学生の服装や物腰について何度も言及している。白楽の場合、特徴的なのは学生に対する態度である。お茶の水大学に着任したとき「バカと叱ってもいいがブスとはケッシテ言うな」と先輩教員に“ありがたい”助言を授かった彼は、ほめて育てることをモットーとしているそうである。白楽自身が大学院生時代叱られて育てられたにもかかわらずである(白楽, 2006: 98-99)。「ほめて育てる」という方針が、教育上のポリシーとして実践されているのならばよい。しかし彼がほめるのは、相手が女性であるからということが文脈からみてとれる。これでは、白楽は女性をバカにしていると解釈されても仕方がない。この話題が容姿の話題と絡めて展開されていることといい、ここでもホモソーシャルな視点と、女性を低く見る視点は維持されている。10年経っても男性教員による視線は変わっていないのだ。

3つ目は、学生を家父長制へと回収する視点である。白楽は女子大の教員をしているとお嫁さんを紹介してほしいと依頼されるが、「お嫁さんにしたくない」卒業生も結構いる一方で、「お嫁さんにしたい」卒業生は「仕事ができる」「いい女」で結婚する気はなさそうに見える、と書き、「お嫁さん」を紹介できずに残念がっている(白楽, 2006: 70-71)。彼は、女子大の地位表示機能が家父長制に貢献できないことを残念がっているとも解釈できよう。

さらに低学歴校勤務(本人言)で10年前の記述でもある加藤大地の場合、学生を家父長制に回収する意図はより露骨である。彼は、「男性に左右されやすい女性の人生の不条理こそ、女性が自らの人生を切り拓くカギとなっている」とし、女子

大は結婚偏差値が高く、入試の敗残者のごとく入学してくる新生入生に、幸福偏差値（結婚の利用可能性）を説いているという（加藤大地，1996：145；155；162）。青木生子の、花嫁学校的な女子大には、（父）親も女子大なら安全と考え花嫁修業として通わせるというニーズがあるため存続繁栄している面もある（青木，1990：40），との批判に呼応する姿勢である。そして就職難の時代に学生たちに永久就職を勧め、「すれた共学大の女性学生」を敬遠し「他の男のツバなどの着いていない、穏やかな温室で純粋培養されたような、可憐な花の女子大の方」を恋愛・結婚のターゲットとして選択する男は多いと論じる加藤（加藤大地，1996：142；149-150）。その視点は女性を性的対象かつ男性の所有物とみる、ホモソーシャルで性支配的な視線に貫かれている。

この2冊は比較的まじめな本であるが、女子大性の“生態”を面白おかしく伝えるという視点は、より性差別的な他の書籍とも共有されている<sup>7</sup>。東京大学の学生の生活を、からかいながら紹介する本は少ない（むしろ東大は知における権威付けとして用いられることが多い）。それに対して女子大（生）を扱う文章の「おもしろおかしい」切り口は突出している。なにゆえ女子大ばかりが「おもしろおかしい」切り口で語られるのだろうか。そこには男性にとって客体化された女性と、ミソジニーの横溢を読み取らなくてはならない。加藤や白楽のような存在は、ホモソーシャルな社会に対して女子大生を「おもしろおかしく」レポートして情報を提供し、一方で、ホモソーシャルな社会を代表して女子大生たちを監視しているのだ。

さらに彼らの記述では、女子大生の“恥態”がことさら強調される。彼らはおそらく本気で学生たちを愚かで学問から遠い存在としてみている（ネタというだけでなく）。研究成果や教育成果をシビアに問われない女子大学にあっては、彼ら年輩の男性教員にとって、学生は愚かでバカであるほど都合がよい。バカが相手ならば、教員は自堕落に自らの価値観を垂れ流すことができるし、権力行使も容易であり、学問的・教育手法面

で自らを磨く必要もないままに規定の給料を受け取ることが可能である。学生自身も、世間も、また教員も学生を愚かであると認めているなら、教員としてこれほど楽で自己研鑽が不要な職場はない。学生が愚かであることは彼らにとって楽なことだし利益でもあるのだ。楽かつ利益でもあるから愚かな学生を言説上において再生産する。そのような言説や視線は彼らの普段の学生に対する応対にも表れているだろう。業績原理と結婚戦略の間で揺れ動き<sup>8</sup>、同時に、つねに強いストレス下に置かれている学生たちにとって、このような「愚かな学生像」は格好の逃避先となり、安易な選択に導かれてゆく。権力者によって作られた言説が現実の対象を作り出すという意味で、これは一種のオリエンタリズムでもある。そして、そのように保護され、男性に依存的で、家父長制に回収されやすい女子学生が再生産されることは、家庭と家族国家観を基盤として成立している国民国家にとっても必要なことなのだ（鈴木，2002：82）。女子大は、セクシャルな視線と、ミソジニーと、家父長制が三点交差する場として、国家を下支えしている。自己の政治性に無意識な男性教員はホモソーシャルな社会からの監督者であり、権力の行使者となっているのだ。

このような女子大教員による言説に注目するには理由がある。女性の教育課程における進路選択について、教員の伝える思想は重大な帰結をもたらす可能性があるからだ。中西祐子は、伝統的な女性役割を内面化した女子は学業成績が低下する傾向にあることを指摘したうえで<sup>9</sup>、女子大の機能は「地位形成機能」と「地位表示機能」に分化しつつあると指摘する（中西，1998：145-146）。すなわち、女子大の競争社会での動員資源を獲得するための教育の場（地位形成）と、結婚を通じた階層再生産を目的とした教育の場（地位表示）という二分化である。前者において学生は流動的な性役割観を身につけやすく、将来展望も総合職希望が多く、定年まで働きたいと望み、職業優先の家庭ビジョンをもちやすくなる。一方後者では、伝統的な性役割観を身につけやすく、一般職での就職を希望し、結婚を機に退職し育児優

先の家庭ビジョンをもちやすくなるという（中西，1998：57-58；113-114；146）。高校・大学ともに，女子教育機関では学力とは異なる基準（ジェンダー観）によって分化が起こっており，事実上，「キャリア女性の養成校」と「家庭婦人の養成校」に二分しているというのだ（中西，1998：152）。中西はこのようなジェンダー観によって学業成績にかかわらず起こる分離を「ジェンダー・トラック」と名づけている。

ここで重要なのは，中西が行ったアンケートのパス解析において，学生の進路選択に対する影響力は，家庭より学校（大学）のほうが大きいという点である（中西，1998：177）。これには普段接する同様の属性をもつ学生たち（ピア集団）の影響力も考えられるが，建学の精神やその大学が持つ世間的なイメージ（校風イメージ）といった要因（チャーター要因）が大きな影響を与えており，どのような価値観をもった大学に進学するかによって，学力による学校間格差以上にライフコースが分かれてしまうのである（中西，1998：153）。そして高校と比較しても，大学での4年間は進路分化装置としての働きが一番大きいという（中西，1998：193）。このようなデータを前にしたとき，問題とするべきなのは，教員が学生と接する際に内面化している価値観，すなわちセクシャルな視線，ミソジニー，家父長制への回収，といった教授内容以外に学内に蔓延する価値観の，学生たちのライフコースに対する影響力である。大学においても，いわば「隠れたカリキュラム」は遍在している。それは，学生への対応，授業中の雑談，試験や課題の難易度や取り扱い，飲み会での一言，といったものであり，一つ一つは小さい事柄でも，ゆっくりと，しかし確実に学生たちの選択に影響を与えていくのである。この点を考えるとき，加藤や白楽らに代表される視線と価値観（そしてそれは平均的な女子大教員の価値観であるかもしれない）は，きわめて犯罪的であるといわざるをえない。

### 3. とまどいの日々

#### 3-1. 家父長制的価値観へのとまどい

大妻女子大学の校訓は「恥を知れ」ださうだ。

恥を知れ。いい言葉だ。女子教育の本質を一言で表現してゐる。

明治四十一年に大妻コタカが創立した大妻女子大学は，良き女子教育の伝統を堅持する数少ない女子大学である。この大学の学生には電車の中で平然と化粧する女性はいないにちがひない。それかあらぬか，大妻女子大学の卒業生の就職率はほぼ100パーセントといふことだ。

フェミニズム女子大学に未来はない。

（千葉，2004：56）

この文章は，反フェミニストを自称するジャーナリストの千葉展正によるものである。彼の“大妻評”はすべてにおいて的外れであり，彼のような性差別主義者による賞賛は，私にとっては侮辱である<sup>10</sup>。しかしそのことはさておき，千葉はジャーナリストとして致命的な過ちを犯している。一度でもよいから，学校が終わる時間帯に唐木田駅から小田急に乗ってみれば「電車の中で平然と化粧する女性がある」ことくらいはすぐにわかったであろうに<sup>11</sup>。取材不足のジャーナリストに勝手にイメージを語られ，教員によっても性差別的なイメージが再生産されているのであれば，私が自身の経験を語ることも許されると思われる。私の個人的な経験でも，それが女子大における政治のありようを照射することにつながれば，その経験を紹介することにも意義があるだろう。

私が女子大に勤務するにあたって，最初に感じたことは，家父長制的価値観の蔓延であった。家父長制的価値観による最初の洗礼は採用される前の段階であった。私の勤務校では何段階かの選考を経て採用者が決定されるが，ある段階において「先生はご結婚されていますか？」と問われた。

このことは強く印象に残っている。なぜなら、当時私はいくつもの大学に同時に応募し面接も受けていたが、既婚であるかどうかを問われたのは現勤務校のみだったからである。大学に勤務するにあたって既婚であるかどうかをなぜ問われるのか、いまだにその意味がわからないでいる。学生たちの範となるような家庭を築いていることが重要なのか、あるいは既婚者であるならば学生に「手を出さない」と考えているのか（実際にはセクシャルハラスメントやレイプにおいて既婚／未婚はまったく無関係であるが）、あるいはそれ以外の理由なのか、謎であった。

着任して数日後、新入生相手のオリエンテーション合宿に臨んだ。その夕食の席で、たまたま隣り合って座った学生から「先生は結婚してらるんですか？」と聞かれた。同じ質問である。入学式後数日しか経っていない新入生が教員に尋ねる最優先項目が、既婚者か否かということであったのには驚いた。「なにを教えているんですか？」や「なにを研究しているんですか？」などではなく「結婚しているんですか？」。彼女らにとって、教員が結婚しているか否かが、学ぶ上でどのような違いをもたらすのだろうか？。家父長制的女子大から強烈な先制パンチをお見舞いされた気分であった。この質問は、その後学生たちから繰り返し問われることとなった。

学生たちの異様なまでの結婚への関心の高さは「自ら“いかに生きるべきか”などといったやっかいなことははじめから考えず、大学卒業後はもっぱら自分以外の人によって「生まれ変わり」たいと願うような他律志向の学生」が女子大に多く進学してくるという六車進子の言を裏付けている（六車、2006：109）。学問によって自分を変革するのではなく、家庭と直結し、今までの自分の価値観を守る場所としての女子大（鈴木、2002：79）に自分が足を踏み入れていたことは、驚きであった。

驚きは教員に対しても感じた。少なからぬ教員が、学生のことを「この子（娘）たち」と呼んでいることにまず驚かされた。共学大において学生たちのことを「子（娘）」と呼ぶ教員には出会っ

たことがない。なるほどこれが家父長制的組織というものかと妙に感心した記憶がある。そしてこの呼称がまかり通っているということは、実際の家父長制と同じく女性が軽視されているということでもあるだろう。「この子（娘）たち」という呼称の背後にはミソジニーが潜んでいた。

現勤務校では、授業の最後に学生による授業評価アンケートを行っている。このアンケートにかんして、かつて同僚の一人は、この子たちにはちゃんと授業を評価できるほどの能力はないから結果は気にしないと放った。社会統計としてこの種のアンケートの信頼性が低いことはよくわかる（実施様態や母集団とサンプルの関係などにおいて）。しかし彼の発言意図はアンケートそのものに対してではなく、学生に対してであった。しゃべってばかりで（授業を）聞いていないし、試験を楽にすれば評価は上がるよ、とも言ったのだ。そんな“バカな学生”を相手にしている自分の仕事の意味は何なのか。自分の仕事の尊厳さえ放棄するのか。しゃべる＝女という典型的なミソジニーに冒され、なぜ自分の授業が「しゃべられる」のかについては一顧だにしない。そして、試験を楽にすれば評価が上がるという学生たちの知性をバカにしきった見方。そんな仕事ならば、すぐにやめてしまえ、と心の中でつぶやいた（就職一年目だったためとても本人に面と向かって言う勇氣はなかった）。

また学生から仄聞したところによると、学生とのコミュニケーションのために食べ物を常備している教員。学生の服装を「水商売の女」と表現する教員。「あなた方の先輩で一流大卒の男性と結婚した人がいる。だからあなたがかもがんばれば高学歴の男と結婚ができるかもしれない」と“励ました”という教員<sup>12</sup>。あるいは、「君たちに言ってもわからないだろうけど」、「君たちは関心がないかもしれないが・・・」と言い放つ非常勤講師<sup>13</sup>。こういった態度が、教育上のポリシーとして女子大以外で教えるときにも実践されているなら、その妥当性はともかく、筋は通っている。しかし、彼らがかつて在職していたり非常勤で教えている名の通った共学大（非常勤講師の場合は現

在勤務している本務校)で、試験を楽にしたり、食べ物を準備したり、結婚に対して励ましたり、「君たちはわからないだろうけど」などと言ったりしている(た)とは、考えにくい(共学大においてそういう教員の話はめったに聞かない)。共学大ではしないのに、女子大でやっているのなら、そこにはジェンダー・バイアスが存在していることになる<sup>14</sup>。

すでに断ったように、これらの話の多くは学生から仄聞したものである。発言の正確さは(発言の有無自体も含めて)保証されていないし、教員の実際の発言意図と異なっていたり、学生の誤解もあるかもしれない。ちなみに私はこれらの教員の善意を疑ってはいない。十分に誠実で学生のためを思っただけの発言であると思う。しかし、それはこの際どうでもいいことなのだ。問題はこのような言説が、たとえ噂話としてであれ、学生間に共有され、それが一種の“校風”を形作る一要素となっている点である。そしてこのような言説が特殊な一個人によるものではなく、複数の教員の言動の集積として多量に流通している場合は、私の経験上、女子大以外には存在しない。前節で検討した加藤や白楽のようなセクシャルで、ミソジニーを纏い、家父長制に彩られた言説は、現実に女子大に満ちている。そしてそのようなミソジニーと学生の軽視を表象する言説、ならびに教員の負担を軽減するための劣化した授業への(言説上の)疑惑は、学生たちに逃避先を与えると同時に、彼女らが修めようとしている学業の価値すら疑うほどまでに追い込む。

着任初年度に驚いたことは多かったが、そのなかでも提出期限を過ぎてから、レポートや課題を提出場所ではなく私の研究室に直接持ってくる学生が少なからず存在したことには、本当に驚いた。「もう提出期限は過ぎているよ」と受け取りを拒否すると、「〇〇先生や××先生は受け取ってくれました」と抗議される。ここでは大学の基本としての課題やレポートの授受にかんするルールも確立していないのかと驚いた。そして単位認定の甘さ。印象としてではあるが、女子大は単位の認定が非常に甘く、例外的措置(期限後の課題

の受け取りや、特別の課題を課して単位認定を行うなど)も多いと感じた。とりわけ再試験という制度(必修科目等で一旦落第となった学生が再度試験を受けて合格することがありうるというシステム)を知ったときには、1年なり半期なり授業を受けて単位を取れなかった学生が、なぜ成績発表後の2週間ほど後に行われる再試験で合格しうるのか、その意味が理解できなかった<sup>15</sup>。

しかし、女子大学の「地位表示機能」という側面に注目するならば、このような単位認定の甘さも説明できる。前述のように、大学で何かを身につけて社会で自らの道を切り拓こうとする「地位形成機能」ではなく、結婚戦略のために所属する社会階層を明示する「地位表示機能」を重視するならば、学問の到達度をシビアに問うことは女子大においては障害でしかなく、重要なことは、つつがなく規定の年数で学生を卒業させることである<sup>16</sup>。それが女子大としての「家父長制への貢献」となりうる。そのような政治に巻き込まれることを拒否したいならば、単位認定であれ、言説の再生産であれ、学生に対して明示的に自らの立場を示すことが必要であると考えようになった。

### 3-2. 学生たちへのとまどい

しかし、より考えさせられたのは、学生たちと接する際に経験した数々の事柄だった。

なお、あらかじめ断っておくと、ここで述べる学生像は、けっして女子大生を代表するものではない。実際、私は多様な学生と接してきた。またなんらかの“女子大生像”なるものを構築してカテゴリー化を行う意図もない(それでは男性による女性の再カテゴリー化になってしまう)。ここで紹介するのはあくまでも個別的なケースである。このことは強調しておく必要がある。しかし個別的なケースではあるが、これから紹介する例が示す特徴は、他の学生にも程度の差こそあれ共有されている可能性があり、彼女らの言動は女子大における政治を考える際に重要な示唆を与えてくれる。

私は着任後すぐに、自分が「将来の最重要目標はお嫁さんになること」と考えている多くの学生



を相手にしていることに気がついた。そのようなタイプの女性は、基本的に今までの私の人生において出遭ったことのない人々であった。彼女らのなかには、暇さえあれば恋愛の話をしている人もいた。私に対しても、こちらから他の話題を振らない限り恋愛の話ばかりをしてくる。こういうタイプの女性も初めてであった。たとえば絵が好きで絵の話をする人、バンドをやっていて音楽の話をする人、いろんなタイプの人を知っていたが、極端に単一の話、しかも恋愛の話題に傾倒している人は初めてみた。驚きのあとに、やがて彼女らはなぜそのように考えるのかを知りたいと思うようになった。

鈴木淑美は、「結婚、子育てこそ幸せ」という価値観が蔓延し、ジェンダー役割を守り男性社会を下支えするような特質を有した女子大を「S系女子大」と命名している。鈴木が指摘するS系とは、サポート、サクリファイス、サーヴィス、のSであり、行動パターンにおいては、捧げる、信じる、巣籠もる、世話する、育てあげる、のSであるという（鈴木、2002：76-77）<sup>17</sup>。この特徴は家父長制再生産志向の女子大および学生を形作るものといえるだろう。考えてみれば、共学大への女子進学率が増加しつつある現在、女子大へ、しかも良妻賢母教育を謳っている私の勤務先に進学してくる学生は、娘を良妻賢母主義の大学に行かせてもよいと思う程度には保守的な親の娘なのだ。親の保守性を受け入れるにせよ反発するにせよ、彼女らにとって家父長制的価値観と伝統的性別役割観は、なじみの深いものであり、すでに入学前に内面化されているかもしれないのだ。入学数日後に「先生は結婚しているんですか？」という問いが入れ替わり立ち代り投げつけられる状況は、彼女らの意識において、世界と自分を結びつけるものが婚姻を中心とした価値体系であることを如実に示している。そのような学生は、当然ながら母性文化のなかに浸かっている。たとえば女子大の授業においてフェミニズムの文脈から母性信仰の問題点を指摘しているにもかかわらず、学生からは「女性は偉大である」、「女性役割に徹してきた母は偉大だ」といった母性礼賛の声

が返ってくるといった状況が報告されているが（鈴木、2002：75；渡辺、2000：63）、同様の事態は私も何度か経験することとなった。

同時に、私は二重の挫折を経験してきている学生が存在していることに気づいた。一つは学歴競争におけるキャリア志向への諦め（地位形成と対応する）、そして結婚戦略における諦め（地位表示機能と対応する）である。このタイプは共学高校出身者に比較的多くみられ、女子大に進学したことでキャリア志向から踏み外したと感じ、同時に自分がかつて参加してきたキャリア競争系列に属する男性に選ばれるには、より偏差値レベルの高い大学に進学しておかなければ難しいと感じている学生である。これは学歴と出身階層の固定化が進むなかで、先に述べた「地位表示機能」がインフレーションを起こしており、すでに中堅女子大においては十全に機能しておらず、有名共学大でなければ自分が希望している「結婚戦略のための資源としての学歴」すらも獲得できないと感じている学生である<sup>18</sup>。

キャリア戦略と結婚戦略の双方において失敗したと感じている彼女らは、自尊感情を欠如させ、なげやりな思考に陥りがちである<sup>19</sup>。その表出は、対人関係において服従か無関心かという極端な態度となって現れやすい。彼女らの会話から漏れ聞こえる日常生活での親や“彼氏”への驚くほどの従順さと、自身の健康や学業に対する驚くほどの投げやりで無関心な態度。大学生である“彼氏”の課題を徹夜で手伝っていて同じ日に提出の自分の課題を提出できなかった学生や、“彼氏”が抱えているトラブルに巻き込まれ長期にわたって登校できなかった学生、さらには熱があるにもかかわらず身近な男性の看病をしたために自身の病気を悪化させてしまい試験を受けられなかった学生。彼女らの行動は「愛」の表出だろうか。たしかに、「愛」は労働によって計測される概念であるから<sup>20</sup>、彼女らの献身と自己犠牲は家父長制的価値観に適合している。しかしその帰結として彼女らの労働力や学習の機会や健康が収奪されている。そして彼女ら自身、その不利益を「仕方がない」と受諾してしまうことも少なくないのだ。

自尊感情の欠如は、女性（しかもキャリア競争から外れた女性）への低評価を内面化した結果であるとも考えられる。勤務校において感じたことの一つに、彼女らが女性同士で企画したことの達成率の低さがある。たとえば、女子大生同士で旅行に行く、遊びに行くといったこと。それらの達成率は数回に一回という低さのようにみえる（もちろん例外や個人差はあるが）。たとえば「みんなで行った春休みの旅行どうだった？」と尋ねて、「ああ、あれは中止になりました」という返事を何度聞いたことか。中止の理由を聞いてみると、「彼氏」をはじめとする男性による禁止や、後から決まった男性との予定を優先させられたりといった身近な男性による妨害も多く、またそれらを通じて学生本人にも「女性が行うこと／女性同士の予定」への自己評価の低さがみてとれる。あたかも夫の目を気にして女性同士の集いに出かけることをためらう専業主婦をみているかのようだ。彼女らにおける自尊感情の欠如は、換言すれば女性への評価の低さでもある。先に紹介した加藤大地は「女性は女性を嫌悪する，“同性反発”の意識が相当に強い」と述べている（もっとも加藤大地の言説は，“同性反発”を女性の欠陥（男性における友情と比べて）として捉えるミソジニーの視点に貫かれたものであるが）（加藤大地，1996：41）。しかし、私も女子大に勤務して、学生たちの多くが相互に嫌悪し合っている場面を何度もみた。普段は仲がよいようにみえるが、じつは「私はあの子とは違う」とお互いに思っているという関係である。

男性から支配され搾取の対象となっている女性は、被植民者とよく似た構造のなかにある。彼女らから搾取されうる“植民地”とは、労働力とリプロダクション能力である<sup>21</sup>。ここで述べた学生たちの言動は野村浩也が植民地主義分析において「劣等コンプレックス」として指摘したものと酷似している。すなわち、被植民者は劣等感と無力感に苛まれ、支配者に助けをもらいたいと感じるようになり、やがて従順さを身につけ、支配者に対して恐れと感謝の念を抱くようになる（野村，2005：89）。これは、あまりにも容易に周囲

の男性に服従する彼女らの姿と重なる。同時に被植民者は、自分と自分の文化を憎悪する。それが自分の無力感の原因と錯覚させられるからで、無力感が強いほど自己憎悪も強くなるという（野村，2006：90）。またフランツ・ファノン<sup>22</sup>は、支配される原住民が相互に争うのは、残された最後の手段として同類に対して自らの人格を守るためだと指摘する（Fanon, 1966=1996：55）。これは彼女らの“同性嫌悪”と重なる。彼女らは相互に女性を蔑視し、僅かな差異を強調することによって自身の尊厳を護ろうとしているのである。女子大において一部の学生にみられるこれらの特徴は、友情の欠如や対人コミュニケーション不全といった女性の欠陥を表すものではけっしてなく、男性による支配の痕跡とみるべきなのだ。

実際、彼女らの公平性に対する感度には驚くべきものがある。ちょっとした扱われ方の差や教員との親密性の格差に敏感にも反応する<sup>23</sup>。それは彼女らが人生において公平性から疎外されてきたことと無関係ではない。彼女らの日常生活の話や聞くと、対男性（兄弟やサークルの仲間）において、あるいは「男性に選ばれる女性」間の競合関係において、不公平に扱われることはいつものことなのだ。そのような日常を生きる彼女らにとって、最も公平さを期待できる場は大学である。その大学においてすら、男性支配的言説を繰り返されることに怒るのは当然である（あるいは男性支配的言説に無条件に屈服する学生もいるが、これは同じことの裏返しである）。またつねに女性同士の競合関係において男性による不平等を経験している彼女らは、大学でもそれが繰り返されることに憤慨するのも当然だ。

繰り返すがこれらの事例に女子大生の代表性はない。しかしここまでの事例から、これらの公平性への希求は、自尊感情の欠如やなげやりな人生への態度と表裏一体となっている可能性を指摘しうるだろう。私が女子大でもっとも苦心してきた点は、いかにして公平性を確保し、また「公平に扱われている」と実感させるかということである。「あなたは公平に扱われている」というメッセージを伝えることが何よりも重要で、それが自

尊感情を取り戻し、人生への自己決定を促すことにつながると考えている。

#### 4. 女子大という戦場

##### 4-1. 疎外と「温室効果」

女子大生たちが疎外されているのは公平性からのみだけではない。彼女らの一部は、たとえば勉強することが自分の将来の糧になる、といった近代階層流動性の原理からも疎外されていた。川喜田好恵は、女子学生が男性と伍して活躍することはしんどいため楽をしたいと考え、差別が彼女らに逆境ではなく「温室」をもたらしている可能性を指摘している（柏木・川喜田・金井・伊藤、2006：15-16）。これは的確な比喻である。現代においては、差別は被差別者に一種の「温室」をもたらすこともありうる。これは被差別者が差別に対して鈍感になること（共犯者になること）によって可能となる「温室」だ。差別に向き合うことは辛いし、自分が被差別者であることに直面することは不愉快な経験であろう。そのようなときに、たとえば男女は体の作りが違う、女性には母性が備わっている、といった男性よって準備された“区別論”を受け入れ、多少の不便は「区別に伴う正当な扱い」として我慢すれば、自分の価値観を変えることなく、自分の位置に向き合う必要もなくなる。「温室」のなかにひきこまれるのだ。それが極限まで進めば、北原みゆりが指摘するように、ドメスティック・バイオレンスを終わらせるために「鈍感になる」という選択をし、我慢することによって嵐が通り過ぎるのを待つ、という心性にまで至ってしまうだろう（北原、2005：193）。このように差別と逆境の程度の不一致が「鈍感さ」をもたらし、結果的に差別を再生産する素地を強固にする現象を「差別の温室効果」と呼びたい。私が感じてきた学生たちへの違和感の核心は、このような「温室効果」であった。この「温室」が彼女らに家父長的価値観を受け入れさせ、ときには積極的に家父長制的価値観の体現者として行動するという、差別への共犯化を促してきた<sup>23</sup>。

このような「温室」は、情報経路の不足によって維持される。金谷千慧子は、関西における女性学教育の調査結果のなかから、女性学を受講した同志社女子大学の学生が「自分の何に不安だったのかがわかった」と感想を寄せていることを紹介している（金谷、2000：177）。彼女らは、公平さ、流動性原理、とともに情報経路からも疎外されてきた。そのことが不安を呼び、不安からの逃避として「温室」が形成される。

近年、低い社会階層出身の若者ほど自己能力感が高いという傾向が指摘されている（三浦、2005：164-166が典型、他に、苅谷、2001；苅谷編、2004など）。それは一言でいえば「世間知らず」ということなのかもしれない。しかし、階層とその帰結である教育システムにおいて様々な情報経路から疎外された人は、自己の狭い価値観のなかで自己の保全と精神的安定を試み、それが結果的に独善的な自己全能感をうむという結果をもたらしていると考えられる。

同様なことは女性においてもみられると思う。私が女子大で驚いたことの一つに、学生たちの結婚に対する全能感がある。彼女らは、これだけ婚姻率が低下し、晩婚化・非婚化が進んでいるにもかかわらず、自分は将来結婚し、人によっては専業主婦になると信じて疑っていない。それは無邪気といってもよいほどだ。現在の婚姻率の低下は構造的な問題であることは、小倉千加子や山田昌弘らによって繰り返し指摘されているにもかかわらずである（小倉、2001；2004；山田、1999；2004、など）。これらの情報には新書や廉価な書籍でアクセス可能であるにもかかわらず、彼女らはそれらの情報の存在を知らないか、知っていても近寄ろうとはしない。もし結婚を人生の中心的価値と考えているならば、これらの言説は「将来の一大事」を警告しているのだから、なにをおいても読んでいなくてはならないはずなのに。彼女らの多くが家父長制的価値観を内面化していることと考え合わせれば、彼女らの結婚への疑い（自分の結婚可能性への疑い）のなさは、自己能力感の高さの表現形態の一つと解釈することも可能である。そして、それは情報経路の不足と関係して

いる。

情報経路の不足にかんして興味深かった出来事がある。ある授業で「マスコミに就職するには色彩検定の資格を取得していると有利だ」との教員の発言があったとの噂が広まり、それ以後学生の間でちょっとした「色彩検定ブーム」が起こったことがある。その教員がどのような意図でそのような発言をしたかはわからないし、そもそもそういう発言が本当にあったかどうか不明である。なぜなら「色彩検定」のテキストを買い込んで勉強を始めた学生たちのなかには、その授業を履修していない学生も多かったのである<sup>24</sup>。人生の進路選択の重要な戦略を、「〇〇先生がこう言っていたらしいよ」という不確定な伝聞を元に決定するという、情報に接するに際しての致命的な態度。あたかも暗室の中に差し込んだ一条の光であるかのように、不確定な情報を素直に受容する態度。これは情報経路の不足がひきおこした混乱と考えられる<sup>25</sup>。

これらの事例を通じて考えられることは、学習意欲とジェンダー要因は情報経路のあり方を介して深い関係にあり、将来の人生のビジョンをどのように構築するかに大きな影響を与えているということである。すなわち女子大の教育において重要なのは、ジェンダーの障害を取り除くことにより、彼女らに学ぶ意味と人生へのビジョンを主体的に獲得することをサポートすることである<sup>26</sup>。しかし彼女らのなかには、学ぶということの意義を理解していない人も存在する。大学での勉強より『JJ』や『CanCam』を読むことのほうが自分の人生にとっては重要だ、と断言した学生もかつていた。競争原理から疎外されているのなら、残るは結婚戦略のみ。学問的知識が豊富なことなど男性に選ばれるに際しては邪魔にこそなれ何も有利なことをもたらさない。むしろ女性誌を熟読しメイクやファッションや体型に気を使い、自分の美を磨くことこそ、人生の成功へのカギになる<sup>27</sup>。その結果、一番ヶ瀬康子が指摘するように、学生たちは学問は虚偽でありアクセサリーの一種であるとの認識をもつにいたってしまう可能性すらあるだろう（一番ヶ瀬・安川・加藤、1995：

276）。

このような状況では、彼女らにどのような学問を教えても意味がない。その学問体系を学ぶ意義を、自分がなぜその学問を学ぶのかという意味を、自分がその学問から何をえられるのかという見通しを、見出していないのだから。このような場では、既存の学問体系を“教える”ことはごく僅かな成果しかうみださないだろう。そもそもそれは必要とされていないのだから。必要とされているのは、学問の中身そのもの以前に、学問を彼女らの人生とかかわらせる意義を考えさせることである。これが、温室の壁を取り払うということにつながるだろう。一部の学生は情報経路を遮断されることによって、無知という壁に囲まれた「温室」に留まることを余儀なくされているようにみえる。それは単に情報経路の不足によって知識量が少ないということの意味しているのではない。野村浩也はファノンに依拠して、無知とは疑問を発することのできない状態であると定義するが（野村、2005：266）、まさに彼女らの問題は、疑問の欠落、疑問を発することを禁止されてきた痕跡という観点から理解されるべきである。

#### 4-2. 戦場の顕在化

「温室効果」を打ち破らないかぎり、どのような学問体系をそのまま“教えた”ところで彼女らの人生と大学は交差しない。せっかく高い学費を払って進学してきたのに、価値観の一つも変わらずに「地位表示財」としての卒業証書だけを与えて学生を送り出すなら、それは家父長制への貢献でしかない。そのように考えた私は、「温室効果」に風穴を開けようという目的を胸に、必修科目「現代社会論」（後に「現代社会論Ⅰ」）においてジェンダー論を扱うことに決めた<sup>28</sup>。

それまでジェンダー論の“門外漢”だった私は、泥縄的かつ必死にジェンダー論の文献を読み漁りつつ授業の準備に追われた。授業を実施するにあたって自らに課した課題は2つあった。1つ目は、ジェンダー論を男性の視点から再構築することを目標にすること。女性学やジェンダー論を女性の視点から伝えることは、私の任ではない。

それはよりふさわしい女性教員の手によってなされるべきだし、実際になされている。また、男性である私が単にジェンダー研究の成果を教壇から学問として“教える”のであれば、それは学生にとって「学ぶ意義」を伝えたことにはならず、さらにいえば多くの女性たちが苦勞して築き上げてきたジェンダー論の成果の「男性による横取り（＝言葉どろぼう）」であり、男性による女性の再定義化すら招きかねないからである。私がジェンダー論にコミットする意味は、その支配の当事者として、支配しているメリット、支配への誘惑、支配の手法などを開示することであると考えた。

最初は、学生たちが疑念をもっていない結婚や家父長制が内包している権力性と女性抑圧の構造を考え、学生たちを挑発することから授業を始めた。ちなみに、この授業の自己評価は散々なものである。毎年改訂を行っても満足のものには未だにならない。それは自分の力不足に加えて、授業が男性である私が男性の権力行使のメカニズムを自己解説するという内容であり、そのような体系は未だ作られていないために試行錯誤を重ねなくてはならなかったことによる。権力の自己分析は難しいのだ。なぜなら権力はそもそも行使するものであって、説明するものではないからだ。回を重ねるごとに、自己のもつ権力への新たな解釈が思いつき、その解釈の変遷を説明するごとに議論は複雑化してゆき、またその変遷そのものが私自身の男性的な思考回路によって考えられたことに起因する、学生が理解する文脈との齟齬の多発。そういった事態が繰り返し発生した。

しかし、その過程で思わぬ効果もあったことがわかった。それはある学生から「男でジェンダーを問題にする人を初めて知った」といわれたときであった。彼女の情報経路には、家父長制的価値観に疑問を感じている男性が存在するという知識が欠落していた可能性がある。そのような存在を知ったことは彼女にとって転換点となったかもしれない。自らの情報経路のありようを見直す契機になったかもしれない。体系とは程遠くグダグダなこの授業も、この点においては意義があったかも

しれない。

課題の2つ目は、男性が行っている支配の手法を重点的に伝えることであった。世の中に差別・抑圧関係は数あるが、その支配の手法には共通点がある。人が人を支配しようとする方法に、バリエーションはそれほど多くはないのだ。このことに気がついたのは、授業のためにあわててジェンダー論を勉強しているときであった。男性支配における既視感。この話はどこかで聞いたような気がするぞ、という感覚。たとえばモデル・マイノリティの存在や分断支配、被抑圧者の共犯化、想像力の奪取、支配者と被支配者の間におけるダブル・スタンダード、オリエンタリズム的言説、等々。それらは、私がそれまでに学んできた沖縄などの民族問題や植民地主義分析においておなじみのものであった。支配者としての自分に突きつけられる事実とその手法にかんする、自分が無自覚であったことに対する苛立たしい気持ちと後ろめたさ。それが対女性の関係においても繰り返し現われた。

これらの差別・抑圧関係は社会的な文脈が異なっている。しかし、異なっているにもかかわらず手法に共通性がある。ということは、手法に意識的であることによって、隠された差別・抑圧関係を想像し、炙りだすことができるのではないかと考えるようになった<sup>29</sup>。この意識に沿って、授業では上記のような手法を強調して男性による支配構造を問題とした。結果的にこの方法は学生たちの想像力を刺激したようである。日常的に疑問を感じていなかった男性とのコミュニケーションにおいて、支配の手法を意識することによって気づかなかった支配への欲望を感じ取ることが可能になった経験をレポートに書いてきた学生もいた。

当初から予想されたことではあったが、この授業は彼女らの価値観を揺さぶることが目的であったため、なかには激しい拒否反応を示す学生もいた。家父長制的価値観を内面化した女性にとって、女性差別について考えたり話したりすることはハイリスク、ノーリターンと映るという（片山、2000：105）。「温室」への逃避が不可能に

なって苦しみ、「かわいい女」として男性に選ばれる可能性も減るからである。また、学生自身の内に「普遍的存在=男性/性的存在=女性」というボーヴォワール以降の女性学が厳しく批判してきた視点が根強く残っているため、ジェンダーと聞くと「女の問題」という意識が芽生え、なにか狭い範囲にとらわれているような感覚に陥り、より“普遍的”な他の問題に関心を移したいと考える学生もいた<sup>30</sup>。

さらにジェンダーの話などは聞きたくないという学生もいる。彼女らは非常にジェンダー・バイアスの強い環境に生活しており、そんなことは私に言われるまでもなくよく知っているのだ。かつて授業評価アンケートの自由記述欄に「聞いていて気分が悪くなった。本当にトイレで吐いた」と書かれたことがある。彼女はきわめて熱心な受講者である。体調が悪くなるまで、胃液を吐くまで真剣に授業を聞いていたのだから。何が彼女の意識をそこまで捉えたのか、私はずっと考えてきた。その後多くの学生と話す中で、強いジェンダー・バイアスに曝されている学生の場合、ジェンダーについての話を聞くことは、それを克服するための希望には結びつかない可能性があることを知った。ジェンダー論を学んで、それを知ることが自分の希望に結びつくと考えられる学生は、まだ恵まれているのだ。一部の学生にとっては、ジェンダーの構造と男性の支配の方法を事細かに知ることは、自分の前に立ちはだかっている壁の高さを思い知らされ、女性(=自分)の弱さを再確認させられ、絶望が拡大するだけなのかもしれない。

そのことに思い至ったとき、私は動揺した。もちろん授業でジェンダーを扱うのは「温室効果」に風穴を開けることを目指したものであり、彼女らを絶望させるためではない。しかし、自分の授業によって現実に絶望を深めている学生が存在している可能性を知り、授業への意志が揺らぎそうになったことは何度かある。しかし、彼女らの絶望とは、広義の「成功不安」でもある。そして今まで女子大においては、この女子大生の成功不安を利用する形で家父長制へと学生を誘導し回収が

なされてきたのだ(池田, 2004a: 36-37)。郭基煥は被差別者が自分に振りかかっている差別を否定する心理は、それを認めれば今後同じことが起こる可能性に耐えなければならないことによってひきおこされると指摘しているが(郭, 2006: 43)、絶望に対してそれに耐える根拠とロジックを伝えることが何よりも重要であることを思い知らされた。

しかし、嬉しい発見もあった。この授業では3度の任意課題を課してきたが<sup>31</sup>、最初の課題では明らかにジェンダー論に対して嫌悪感を示していたのに、回を追うごとに書く内容が変化し、最後にはジェンダー論を武器にして自分の周囲のジェンダー圧力を切り拓こうとする意思を感じさせるまでに、変化を遂げる学生が毎年必ず存在した。そうなったときの彼女は、驚くべき明晰さと鋭い分析能力をみせつける。もとより彼女らはジェンダー・バイアスがいかなるものかは肌身を通じて知っているのだから、題材には事欠かないし情報量は圧倒的である。言葉によって自分を囲んでいた重圧を切り崩して征服し、そのことに本人も興奮していることが伝わってくる。彼女は周囲の世界を今までとはまったく違ったものとして再認識する。本当は自分が変わったのにまるで世界が変わったような感覚に包まれるという。これこそ学問の醍醐味で、こういう一種の「うまれかわり」の過程がよくわかるレポートに触れたときは、教師冥利に尽きる思いだが、しかし彼女らと他の学生を隔てた分水嶺が何であったのかは未だに明確ではなく、それを考えることは今後の課題でもある。

この授業(現代社会論)で私がつねに目標としてきたのは、彼女らの日常そのものと、社会における家父長制的価値観が交差する場所としての女子大が、女性のあり方のイメージをめぐる戦場であるということを顕在化させることであった。それは、男性として育ち、人並みには男性のジェンダーを内面化している私自身の政治的解剖を行うという内なる戦場であったと同時に、同様の作業を通じて学生にも自身の身体と生活が、ジェンダー・イデオロギーの戦場であり、彼女らの身体

と、その身体が集う女子大という場においてその戦いが日々行われていることを想起させることであった。そしてこの戦場においては、自分が戦場にいるということを意識していなければ、たちまち一方の陣営（家父長制軍）に組み込まれてしまう。この場に立ち入った者は、教員であれ学生であれ、いずれにしろ戦闘を避けられないのだ。ここには中立など、論理的にも存在しない<sup>32</sup>。

着任してから1年くらいの間に、同僚たちから「慣れましたか？」と何度も尋ねられた（最近はまだ尋ねられないが）。もちろんその言葉は暖かい善意による親密さの表現であることは十分に承知しているし、そのような声をかけてくださった同僚には心から感謝している。しかし、この「慣れましたか？」という問いかけを受けるたびに、私は返答に窮してしまったのも事実である。そして現在もまったく「慣れて」はいない。違和感は、最初は自分の位置に対するとまどいと共に、後には戦場にいるという自覚と共にある。戦術的なことは別として、精神のありようとして戦場に「慣れる」ということは、戦場を自覚しているかぎり、その緊張感によって達成不可能であるように思われる。

そこで必要とされることは、学問体系（それも男性によって形作られてきた体系）を“教える（teaching）”ことではない。学生たちに疑いを抱かせ、男性を裏切らせ、自己を確立する基盤を耕す契機を与える“教育すること（educating）”であると考え。そのことに思い至ったとき、私は“教える”ことをやめた。そして自らの存在をジェンダーの政治的関係のなかにおいて開示し、その特徴を学生たちの肥料となるべく提供することを、私の女子大における第一の存在意義と考えようになった<sup>33</sup>。

## 5. 女性支援教育へ向けて

田上時子は、女性学を教える際の理念として「エンパワーメント（内なる力を引き出す）」、「アン・ラーニング（習ったものを見直す）」、「セルフ・エスティーム（自尊感情）」の3つを

挙げている（田上，2000：78）。このような理念は、これまで論じてきたような女子大における家父長制的価値観の蔓延を考えたとき、有効かつ必要なものだろう。しかし、それは女性学やジェンダー論としてのみ教えられるべき内容だろうか。加藤春恵子は女性学の内容を必修科目で教えることによって、全員に女性学を「くぐらせ」る必要性を指摘した後、専門科目において教えることの重要性を説いている（一番ヶ瀬・安川・加藤，1995：282）<sup>34</sup>。もっとも避けなければならない事態は「女性学」や「ジェンダー論」といった科目が設置されたがゆえに、ジェンダー論的視点がその科目に集中し、ゲッター化されることである。何度か参照している関西における女性学実践調査（授業担当者対象）においても、「女性学関連講座はあらゆる学部学科で実施すべき」とする見解に対して「そう思う」が74.4%、「まあそう思う」が12.8%であり、女性学を専門とする専攻を設置するといった見解と比べて突出している（金谷，2000：169）。またこの調査では、授業で女性学を学んだ後、卒論でジェンダーの視点を含んだテーマを選ぼうとするが、ジェンダーの視点を持った卒論担当教員が少なく学生が困っているといった情報も寄せられている（関西大学のケース）（金谷，2000：204）。じつは、このような悩みは、私の勤務先においてもしばしば学生から寄せられるものである。

これらの帰結として、女子大においては、学部学科を問わずにジェンダー論の授業が設置されるべきのみならず、他の専門科目においてもジェンダーの視点を組み込んだ授業展開を行い、授業体系全体としてジェンダー・コンシャスネスを確保する必要性が浮き彫りになるだろう。その際に重要なのは男性教員の意識である<sup>35</sup>。まず、女子大に勤務する男性教員がどのような女性観、ジェンダー観をもっているのかについての基本的なデータさえ存在していないのが実情である。女子大における教育活動の政治性に鑑みて、とくに男性教員のジェンダー観や、ジェンダーに対する意識を喚起するための方策がどのように実施されているかといった点についての基礎的なデータを集める

ことは、緊急の課題であるといえる。

その次の段階として、男性教員に対するジェンダー教育の必要性が論じられなければならないだろう。本稿でも論じたように、女子大においてはセクシャルな視線、ミソジニー、家父長制への回収といった、男性教員による性差別的な言説が横行しており、それらの言説の結果、一般社会とのホモソーシャルな連携と大学内での男性教員間のホモソーシャルリティが維持されている<sup>36</sup>。これらの男性教員の権力については、今までにも女性から批判が投げかけられてきた（鈴木，2002など）。しかし、この手の批判にはそれを無視する手法が準備されている（たとえば“オバタリアン教授”といった揶揄や女性の戯画化など）。しかし、この批判を男性教員から投げかけられた場合、他の男性教員はこれを無視できるであろうか。それはホモソーシャルな関係への参加の拒否に留まらず、それへの明示的な攻撃となる。多くの男性はそのような場合の対応がわからないのではないだろうか<sup>37</sup>。したがって、求められている戦略は、男性教員による男性教員に対する批判と呼びかけであり、その帰結としての混乱である。それ自体の結果として、男性教員同士でミソジニーと家父長制的発想を炙りだすような仕組みが必要である。女子大に勤務する男性教員は、もっと盛大に混乱しなければならない。混乱すれば考えなくてはならなくなる。それらは決して思想統制ではない。女子大の社会的存立基盤を考えた際に、そこで勤務する者に必要最低限課される倫理的なガイドラインに過ぎない<sup>38</sup>。

そしてそのような問題意識が男性教員を含めて大多数の教員に共有されたとき、それぞれの教員が研究するすべての専門分野の授業を通じて、ジェンダーと社会における女性の地位が問い直されるだろう。そのとき初めて、女子大は本格的な女性支援の場となりうる。そこで実践されるものは「女性支援教育」と名づけられるに相応しいものとなるだろう。

「女性支援教育」とはどのようなものであるべきだろうか。従来の「女子教育」の一部には伝統的性役割観を植えつけるものがあつたが、いうま

でもなくそのようなものとは一線を画していなければならない。従来、男性を中心に、男性社会を分析するものとして発達してきた諸学問を、それぞれの学問的文脈において女性の地位向上と社会進出の観点から再編成されたものでなければならない。高等学校と社会人の間においての、高校教育と生涯教育の結節点としての、高等教育機関としての女子大こそがその発展の中心的役割を担うに最もふさわしい。

そのような場において「女性支援教育」が理論的にも実践的にも発展させられ、教授法も精緻化するならば、それはやがて社会人を中心とした再教育・生涯教育へとその伝達場を移してゆくべきである。データは少し古いが、たとえば日本女子大の卒業生の半数以上はなんらかの形で再教育を受けており、同時に再教育を希望する者は80%を超え、女性のライフサイクルを見通した生涯学習の場として女子大への期待は高まっているという（青木，1990：23；1995：23）。さらには大学と各地の女性センターとの連携の必要性も指摘されている（金谷，2005：185）。人権啓蒙活動を中心に行ってきた女性センターでは、たとえば経済や労働問題についての関心が薄いことも指摘されており（金谷，2000：188）、この点などは専門分野の教員を抱える女子大こそがその欠落を埋める担い手として期待される分野である。このように、社会には「女性支援教育」への需要が高まっている。残されているのは、大学の側が「女性支援教育」の名にふさわしい学問体系を再構築することと、それにむけての基盤を整備することなのである。

小山静子は、女子教育の可能性を考えることは同時に男子教育を相対化することと並行して進められなければならないと指摘しているが（小山，2006：49）、本稿で提起する「女性支援教育」は、まさにそのような男性中心主義の学問体系と、男子教育として発達してきた大学での高等教育のあり方を問い直す作業でもある。かつて青木生子は、「男性社会の縮図（従来の共学大学のあり方）ではなく、真の共学大学が生まれ、女子大が不要となる世界を期待したい」と述べたが



(青木, 1990: 55), 「女性支援教育」の構築は, そのような世界への一歩となるはずである。そのためには男性による学問と学術権力の相対化が必要であり, そのためには, 男性自身による, あらゆる学問分野における, ジェンダー意識の喚起と従来の学問に潜む男性権力の洗い出しが必要である。

そのためには, “人” が変わらなくてはならない。そして, 男性教員がもっとも「うまれかわる」可能性が高い場所が女子大である。その理由は日々繰り返されてきた家父長制的なジェンダー・ポリティックスの回路が女子大にこそ明示的に存在していることである。その回路を逆に作動させ, 従来の政治とは逆の, 男性が女性(学生)とともに男性の権力を問い直すことを実践する場に作り変える。すなわち今までとは別の種類の戦場を作り出すことが求められている。その作業は, 男性自身の手によってなされなければならないし, 男性教員にしかできないことである。そのような“新たな戦場”を通じて, 新たな「女性支援教育」を作り出すこと。それが女子大に勤務する男性教員に課された政治的・学問的使命であり, そこにこそ今後の女子大の存立基盤と, 社会における存在意義が存するであろう。

り, 大学や学問にはまったく触れられていない(加藤主税, 1997; 2006)。

<sup>6</sup> もちろん教員も聖人ではないのでセクシュアルな視点で学生を眺めることもあるかもしれない。しかしそれはあくまでも私的なセクシュアリティの問題である。これらの言説が問題なのは, 男性教員の私的なセクシュアリティを公的な言説に変換させ, “女子大生”という記号に表象・転嫁させている点である。

<sup>7</sup> 加藤大地の著作には, たとえば国立大学からの天下り教授への批判や, 女性差別的な企業の人事面接などに対する怒りにかんする部分など, 真っ当な記述も多い。しかし, 彼はジェンダーが絡むと途端に発想が性差別的になる。そのため, 書籍の内容からしてこの本は全体が濃厚な性差別意識に貫かれている。しかし加藤のような認識は, 案外と女子大に勤務する男性教員の平均的なものであるかもしれない。

<sup>8</sup> 女子大の学生が直面させられている業績原理への成功不安と, そこからの逃避先としての結婚戦略の選択については, 池田(2004a: 35-37)を参照されたい。

<sup>9</sup> ただし, 学業成績上位者にも伝統的女性役割を内面化している例があり, これは学校文化が求める従順性の帰結であるという(中西, 1998: 43-44)。

<sup>10</sup> 就職率と校風を結びつけて論じるあたりは, 大学の実情に対してあまりにも無知であり, ジャーナリストとしても取材不足は否めないだろう。

<sup>11</sup> 教室も含めて, とくに若い女性が「公的な場で化粧を行うことを批判すること」の問題性と政治性については, 拙稿(池田, 2004a: 33-34)において論じたので参照されたい。

<sup>12</sup> このような言説は, 「立派な夫とのバランスを求めて, 女性も高学歴化し, 見合いの代わりに出会いを求めて四年制大学に進学する」という傾向(中西, 2006: 92), すなわち結婚戦略のための学歴利用, ならびに女子大の「地位表示機能」と対応しているといえるだろう。

<sup>13</sup> 女子大に勤務する専任教員は, 普段の学生と

<sup>1</sup> 本稿では, 「女子大」は女子大学を, 「女子大生」は「女性の大学生」ではなく「女子大に通う学生」を指すこととした。

<sup>2</sup> これらの性格は, 現実的には一つの女子大に並存しており, 各大学の特色はそれぞれの性格の程度によって異なっていると思われる。

<sup>3</sup> 保護主義的別学制度については, 池田(2004a: 34-35)を参照。

<sup>4</sup> ちなみにこの本は, 読売新聞夕刊の連載をまとめたものである。

<sup>5</sup> 女子大の教員によって著された女子大をテーマにした書籍は多いが, その多くが興味本位のものであり, 論評にすら値しないものである。たとえば典型として, 加藤主税(英語学, 占い講師, マジック講師: 著者紹介より)による一連の著作は, 学生に集めさせた小話や猿談で成り立ってお

の接触を通じて彼女らの人間性や尊厳に触れる機会があるが、非常勤講師の場合、週に一回90分の接触しかなく、また女子大での教育は自身の“本業”ではないという意識もあるかもしれない、言説や言動において、社会における「記号としての女子大生の表象」、すなわちセクシャルな視点とミソジニー、家父長制への回収を権力的に再生産してしまう可能性が専任の場合に比べてより高いことも考えられる。非常勤講師に多くの科目を依存している女子大としては、非常勤講師の意識やジェンダー観にも注意を払う必要があるだろう。

<sup>14</sup> 女子大において繰り返されるジェンダー・バイアスに満ちた言説については、鈴木淑子が詳しく紹介している（鈴木，2002）。

<sup>15</sup> このような単位認定の甘さ、特別措置、再試験制度などは、女子大特有の問題ではなく、低偏差値校一般においてみられる傾向かもしれない。しかし再試験制度は全学的に行われていたものであり、総合大学である現勤務校には決して低偏差値とはいえない学部も存在する。したがって、この“甘さ”は偏差値の問題ではなく、女子大によるものと解釈するほうが妥当であると考えられる。

<sup>16</sup> なお勤務校の名誉のために付記すると、この再試験制度はすでに廃止され、単位の認定も全般的に厳しくなりつつあるなど、状況は改善されつつある。

<sup>17</sup> 鈴木によるこの「S系女子大生」という概念には、新たな女性のカテゴリー化という側面もあり、その意義を認めつつも一定の留保が必要な概念であると考えられる。「S系女子大」という概念の評価については拙稿（池田，2004a：34-37）を参照されたい。

<sup>18</sup> たとえばこのようなタイプのある学生は、彼女らに対して他大の男子学生からしばしば投げつけられる性差別的な勤務校の蔑称を自虐的に口にして、自分たちが“遊びの相手”としてしかみられていないと、怒りと諦めとともに語った。また別の学生は、高学歴大学の男子学生と学生時代から付き合い合っていたのに、相手は見合いでお嬢様系女子大の卒業生と結婚し、あっさりと捨てられたというOGの話（そういう“伝説”にはいくつ

かのパターンがあり、学生の中に受け継がれている）を引き合いにだし、自らの将来への展望の暗さを語ったことがある。

<sup>19</sup> この自尊感情の欠如と投げやりさは多くの女子学生に共有されているようだ。森永康子の調査によると、将来の人生設計（就労の形態も含めて）を結婚相手次第と考えている女子学生（共学／女子大を問わず）は6割を超えるという（森永，2006：101）。

<sup>20</sup> 女性に求められる愛情は、家事や育児、男性の世話、介護、あるいはセクシュアリティの許容といった、労働や身体の使用を基準として語られることはいうまでもない。

<sup>21</sup> 両性間における植民地主義（植民地主義分析の男女差別への応用）については、拙稿（池田，2003；池田，2004b）において述べたので参照されたい。

<sup>22</sup> その極端な例としては、ゼミナール後において教員とごはんを食べに行った回数をめぐって学生同士が揉めたという話を聞いたことがある。

<sup>23</sup> 実際、彼女らの一部は充分的な言説を生産する。外国人への蔑視、障害者への蔑視、出身地や出身階層への侮蔑的言説（それらはバッグや靴といった「階層のマーカ財（表象財）」への侮蔑的言説として表されることが多い）。彼女ら自身差別され、また差別するという、典型的な抑圧移譲の文脈のなかに位置づけられ、差別的な言説のなかに押し込められているとも考えられる。

<sup>24</sup> なおこの話には後日談がある。「色彩検定」ブームに沸く学生たちを見てバカらしく感じていた一人の学生が、冗談で「時刻表検定を受けたら旅行業界に就職するときに有利らしいよ」と友人に言ったところ、これまた小規模ではあったが「時刻表検定ブーム」が起こったとのことである。ちなみに、マスコミも旅行業界も共に学生たちに人気がある業界である。人気があるにもかかわらず、その実態とはかけ離れた情報が拡大されて流通し、それを鵜呑みにして人生の戦略を立てるといふ、情報経路から疎外された状況が繰り返されてしまう。

<sup>25</sup> なお、このような情報経路の不足が、ジェンダーによってもたらされたものなのか、社会階層によってもたらされたものなのかは、厳密に区分することは難しい。偏差値競争から一歩外れたところに位置する女子大の場合、学生たちの出身階層や蓄積してきた文化資本にも大きな幅があることが考えられる。たとえば、兄弟が高偏差値大学に通っているという階層の学生から、自宅には本棚というものが無いといった学生まで、家庭状況は多岐にわたっている。おそらくジェンダーと階層の双方が彼女らの情報経路に影響を与えていると考えられるが、どちらの要因によって何が規定されているのかは、今後より詳細な考察を必要とする課題である。

<sup>26</sup> 女子大生が主体性を獲得することの困難さについては、拙稿（池田、2005b：88）の事例を参照されたい。

<sup>27</sup> 諸橋泰樹が指摘するように、女性誌というメディアには思考停止、社会への意識から視線を逸らす役割が備わっており（諸橋、2006：259）、これが「温室」の形成をさらに促進することとなる。

<sup>28</sup> カリキュラムとして女性学やジェンダー論を整備している大学が少ない現状においては、各教員が担当する科目においてジェンダー論を実質的に教えるしか方策はない。私の勤務先においても、キャンパス共通の教養科目として「ジェンダーと社会生活」という科目があるものの、学部・専攻の専門科目としては存在していない。関西地区の女性学教育に関する調査においても、女性学関連講座の開設の経緯として「自分の担当科目授業を女性学の視点の内容で始めた」が28.6%で最多となっている（金谷、2000：166-167）。

<sup>29</sup> このように“手法”に着目し、植民地主義を再認識しようとする試みについては、拙稿（池田、2005a）に詳しいので参照されたい。

<sup>30</sup> このようなタイプの学生は、学問に対しても意欲的で「女性であることの不自由さ」から逃れたいと考えている女性に多い印象をもっている。彼女らは「ジェンダーを考えることは自分が縛られているようで嫌」と言っ

論から遠ざかる。ただし、ゼミナールでの指導経験では、このような真摯なタイプの学生は、紆余曲折を経て最終的にはジェンダーの問題に回帰し、卒論で取り組むといったケースも多いように思われる。

<sup>31</sup> ちなみに私は3回の課題のすべてにおいて、全員にコメントを付して返却している。これは、このようなコメントを教員からもらったことが小中高を通じて初めてであったという学生に複数出会ったことがきっかけであった。彼女らは、教師からも、親からも、同級生からも、意見や成長の過程を無視され、女の意見は取るに足らないもの、女の意見など価値のないもの、女の成長などには無関心であるとして、知的なコミュニケーションにおいて無視され、阻害されてきた経験を持っていた。そこで課題の内容以前に、毎回の課題を継続的に見ているぞ、彼女の意見に継続的に注意を払っているぞというメッセージを送ることこそが、彼女らにとって重要かつ必要なことであると考えようになった。一度課題を提出しコメントを受け取った学生の多くは、その後も継続的に課題を出し続けるようになるし、そのような学生のなかから自身の思考と情報経路への態度を大きく転換させる学生も現れるようになった。このような措置は、男性から知的場面において無視されてきた彼女らの自己評価の低さに対する、リハビリテーションの意味合いをもつものとして必要ではないかとも考える。

<sup>32</sup> 本稿におけるこのような戦争のメタファ自体、男性のジェンダーによる発想であるとの批判があるだろう。その批判は正当であると私自身も考える。しかし女子大における言説の政治が男性社会の論理（家父長制）によって作り出されたものである以上、それを顕在化させ、明示し、解体する過程において、戦場というメタファは必要であると考えられる。

<sup>33</sup> なお念のため誤解のないように断っておけば、私は学問を授業で教えることをやめたのではない。むしろ授業内容が多く補講を入れなければ終わらないくらいである。ここで問題化したいのは、学問の伝授の目的と方法を、ジェンダー・ポ

リティックスの関係性をつねに参照しつつ、再構成して伝えることの必要性である。

<sup>34</sup> 女子大学において女性学やジェンダー論を必修で教えるべきか否かということは、難しい問題である。私自身は、基本的には大学の授業は履修したい者が履修すればよいと考えているが、「4-2」において述べたように、おそらく選択科目であったならば履修しなかったであろうと思われる学生たちのなかから、ジェンダー論との「強制的な出会い」を経て大きく変化する学生もおり、必修でジェンダーを学ぶことの重要性もまた存することは確かである。

<sup>35</sup> もちろん、女性教員にもジェンダーに対する意識が求められるのは言うまでもないが、それでも彼女らは生活経験上、学生たちの直面している問題を共有していることが多いと思われる。それに比して男性教員は、そのような問題の存在さえ意識せずに生活できてしまっている点で、明示的にジェンダーへの意識を喚起する必要があると考える。

<sup>36</sup> 女子大学内の男性教員間におけるホモソーシャルリティの維持のために、学生が資源として動員される点については、拙稿(池田, 2004a: 33-34)を参照されたい。

<sup>37</sup> この点にかんして興味深い話がある。私のジェンダー論の授業を受講した学生が、身近な男性にその話をしたところ、「どうせ結婚もできないブスババアが言ってんだろ?」と言われ、「いや、男の先生だよ」と返したところ、彼は沈黙したというのである。この種の沈黙こそ、男性間におけるホモソーシャルな政治を転換させる基点となりうるのではないかと考える。

<sup>38</sup> しいて言えば、(悪名高いものの)アメリカ合州国において実施されたPC(ポリティカル・コレクトネス)に近い作用をもつものであろう。

#### 参考文献一覧

- 青木 生子 1990『明日の女子教育を考える—女子大学長の手帳から』講談社  
青木 生子 1995「女子大学の現代的意義」日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論』ドメ

ス出版: 10-25

- 千葉 展正 2004『男と女の戦争—反フェミニズム入門』展転社  
Duru-Bellat, Marie 1990 *Quelle formation pour quels rôles sociaux?*, (中野知律訳1993『娘の学校—性差の社会的再生産』藤原書店)  
エドワーズ 博美 2002「脱・家庭崩壊社会への胎動」『正論』362: 334-343  
Fanon, Franz 1966 *Les Damnés de la Terre*, (鈴木道彦・浦野衣子訳1996『地に呪われたる者』みすず書房)  
白楽 ロックビル 2006『脱力系女子大教授』丸善  
一番ヶ瀬康子・安川悦子・加藤春恵子 1995「女性科学者と女子大学」日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論』ドメス出版: 234-309  
池田 緑 2003「男性言説をめぐるポリティックス」『社会情報学研究(大妻女子大学紀要—社会情報系—)』12: 17-38  
池田 緑 2004a「女子大学に勤務する男性教員の政治的位置性」『社会情報学研究(大妻女子大学紀要—社会情報系—)』13: 25-41  
池田 緑 2004b「“男女共同参画”とその社会的言説—産業社会と寛容さをめぐって—」『社会情報学研究(大妻女子大学紀要—社会情報系—)』13: 9-23  
池田 緑 2005a「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察I—」『社会情報学研究(大妻女子大学紀要—社会情報系—)』14: 55-77  
池田 緑 2005b「平等, 寛容, 想像力, そして植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察II—」『社会情報学研究(大妻女子大学紀要—社会情報系—)』14: 79-99  
郭 基煥 2006『差別と抵抗の現象学—在日朝鮮人の<経験>を基点に』新泉社  
金谷 千慧子 2000「関西における女性学の実践—調査分析—」渡辺和子・金谷千慧子・女性学教育ネットワーク編著『女性学教育の挑戦—理論と実践』明石書店: 159-190

- 荻谷 剛彦 2001『階層化日本と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会へ』有言堂高文社  
 荻谷剛彦編 2004『学力の社会学』岩波書店  
 柏木恵子・川喜田好恵・金井篤子・伊藤裕子  
 2006「座談会 ジェンダー・アイデンティティ－揺らぐ女性像」伊藤裕子編『ジェンダー・アイデンティティ－揺らぐ女性像』至文堂：9－41  
 片山 陽子 2000「『女性学』を受講して」渡辺和子・金谷千慧子・女性学教育ネットワーク編著『女性学教育の挑戦－理論と実践』明石書店：105－107  
 加藤 主税 1997『ちから教授が集めた女子大生の内緒話』近代文芸社  
 加藤 主税 2006『天地がひっくり返りそうなおはなし?』中部日本教育文化会  
 加藤 大地 1996『女子大は憲法違反か!?』三一書房  
 北原 みのり 2005「気がつけば『女性憎悪』全開の時代」『論座』2005年3月号：190－193  
 小林修典・西井麻美・山下美紀編 2006『女子大学ターヘルアナム』大学教育出版  
 小山 静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房  
 小山 静子 2006「講演女子教育を超えて」神戸女学院大学文学部総合文化学科編『女子教育、再考』冬弓舎：15－50  
 真橋 美智子 1995「日本の女子大学の現状と課題」日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論』ドメス出版：144－172  
 三浦 展 2005『下流社会－新たな階層集団の出現』光文社新書  
 水原 克敏 2005「男女共学の歴史的経緯と今日的課題」生田久美子編『ジェンダーと教育』東北大学出版会：87－136  
 森永 康子 2006「女子学生のキャリア意識」伊藤裕子編『ジェンダー・アイデンティティ－揺らぐ女性像』至文堂：99－108  
 諸橋 泰樹 2006「『考えない時代』『格差社会』と女性雑誌」伊藤裕子編『ジェンダー・アイデンティティ－揺らぐ女性像』至文堂：250－266  
 六車 進子 2006「歴史のなかの女子大学－女子大の体験から」神戸女学院大学文学部総合文化学科編『女子教育、再考』冬弓舎：103－129  
 中西 祐子 1998『ジェンダー・トラッカー－青年期女性の進路形成と教育組織の社会学－』東洋館出版社  
 中西 祐子 2006「女子高校生の進路選択」伊藤裕子編『ジェンダー・アイデンティティ－揺らぐ女性像』至文堂：87－98  
 西尾幹二・八木秀次 2005『新・国民の油断』PHP 研究所  
 野村 浩也 2005『無意識の植民地主義－日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房  
 小倉 千加子 2001『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書  
 小倉 千加子 2003『結婚の条件』朝日新聞社  
 Sadker, Myra and Sadker, David 1994 *Failing at Fairness: How Our Schools Chart Girls*, (川合あさ子訳1996『「女の子」は学校でつくられる』時事通信社)  
 Sedgwick, Eve. K 1985 *Between Men*, Columbia University Press, (上原早苗・亀澤美由紀訳2001『男同士の絆』名古屋大学出版会)  
 鈴木 淑美 2002「『S系女子大生』という生き方」『大航海』43：74－82  
 田上 時子 2000「様々な授業法の試み」渡辺和子・金谷千慧子・女性学教育ネットワーク編著『女性学教育の挑戦－理論と実践』明石書店：78－81  
 寺山 修司 2003『寺山修司名言集身捨つるほどの祖国はありや』PARCO 出版  
 渡辺 和子 2000「女性学とアメリカ文学」渡辺和子・金谷千慧子・女性学教育ネットワーク編著『女性学教育の挑戦－理論と実践』明石書店：59－64  
 山田 昌弘 1999『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書  
 山田 昌弘 2004『パラサイト社会のゆくえ』ちくま新書

## 付記

本研究の一部は、大妻コタカ記念会学術研究補助（2005年度）、ならびに、大妻女子大学社会情報学部プロジェクト研究費（特定枠：2006年度）によってなされた。

また、本稿の内容は大妻女子大学社会情報学部の学生および池田ゼミナールの歴代学生諸君との議論に負うところが大きい。記して感謝したい。

## Strange Love of Faculties in Women's Universities or : How I Learned to Stop "Teaching" and Love the Battlefield

IKEDA MIDORI

*School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

### Abstract

It has been said that there were "a position formation function" and "a position representation function" for an educational purpose at women's universities. However, in a trend of gender equality society, substantiality of "a position formation function" is pursued in women's universities.

On the other hand, the old-fashioned gender role is often reproduced in women's universities. In addition, the project which is going to lead students to field such values of a patriarchy is left in women's universities firmly. There is such a project with sexual eyes to women and misogyny. Faculties in women's universities sometime share those elements with the environment surrounding women's universities. And a sense of values of a patriarchy reminds female students "uneasiness to succeed", diminishes self-evaluation, and leads themselves to a dependence on men.

As a result, "a position representation function" is made much of in women's universities, and it keeps female students away from studying. In this way, the traditional gender role is reproduced by education of a patriarchy, and the process when motivation to study of students is robbed and resembles a "greenhouse effect".

To change this situation, it is necessary we make it, and re-create "a greenhouse" into "a battlefield" to do where gender politics is easy to be seen. Therefore at first we have to let male faculties understand that it is the first step to let a female student oneself understand the significance of studies to overcome gender inequality. And it is necessary for faculties to understand that a study of this kind is equal to it with social demand.

The making of system for male faculties to become conscious in gender is the need so that male faculties share such recognition. In all classes, that we do reconstruct of a male-centered study system is demanded at the same time from a viewpoint of gender. If such an effort is made, education performed in women's universities comes to have "support education for women" and a meaning to say in future.

### Key Words (キーワード)

faculty in Women's University (女子大学教員), feminism (フェミニズム), gender politics (ジェンダー・ポリティクス), support education for women (女性支援教育), positionality (ポジショナリティ), patriarchy (家父長制), homo-sociality (ホモ・ソーシャルリティ), misogyny (ミソジニー), "greenhouse effect" in women's university (女子大学の「温室効果」)